

2019年度 入賞者作品集

やさしさを  
行動に

心の輪を広げる体験作文  
障害者週間のポスター

令和2年1月

主催 茨城県・茨城県教育委員会



茨城県

# 耳と目と心

水戸市立石川中学校 三学年

おか だ しょう ごと

岡田昇悟

「何か私にも、出来る事はありますか？」と、困っている人を見かけた時は、声をかけられる大人になれると良いね。と、母によく言われて成長してきました。私は小学生の頃、夏休みにパン屋さんへ、パン作り体験に行った事があり、母の言葉の意味が中学生になり、ようやく深く理解出来る様になりました。当時、パン屋さんへ到着すると、とても静かな空間でした。作業場からは、カタカタという小さな物音しか聞こえてきませんでした。そのパン屋さんは、母の友達で、耳にハンデを持っている、ろうあ者の方のお店でした。あいさつは筆談から始まりました。作業が始まってからも筆談で教えてもらいながら、職人さんの作業を見ながら、真似をしてついていきました。少しずつ筆談の途中で手話が入ってきて、半分も理解できなかったが、お互いジェスチャーと口話で作業が進んでいきました。相手が伝えようとしている事をわかりたいと思うと、相手の顔の表情と、ジェスチャーに集中して向き合っている私達がそこにはいません。人は伝え合おうとすると、表情とジェスチャーでわかり合えるのだと気づきました。作業空間に慣れてきた頃、周りの様子も少しずつ見られる余裕が

出てきました。作業をしていると、耳にハンデがある人が、近くを通る時は、体験者である私達は、通りやすい様に気配を感じて立ち位置を変えたり、神経を色々働かせる様になっていました。耳が聞こえたら、通る側の人が声を出して、気づいてもらい通らせてもらう流れが大半だが、誰かを気にかけるという事は、本当は自然に出来る事なのだと思います。ろうあ者の方達は、相手に伝えたい事がある時は、相手がびっくりしない様に、様子を見て、視野に入り込んでから肩をポンポンと優しくたたき自分の方を向いてもらっていました。作業の進む中で、一つ一つの発見があり、パンが焼けるまでの間、手話を教えてもらい、筆談で色々話が出来ました。ろうあ者にパン作りを教えてもらおう中で、私は沢山気づかされた事が多く、母の友達のろうあ者の方は、赤ちゃんの泣き声が聞こえない中、子育てをがんばったそうで、双子の子育てをしたお母さんだと聞いて重ねておどろかされました。「何か私にも、出来る事はありますか？」この言葉は、ハンデが有っても、無くても、誰でも自分がやれる事はやって生きているからこそ、相手に問う事からがコミュニケーションだと思おうようにな

れました。「やります。」とすぐ手を出す前のコミュニケーションを大切にしたいです。昔の出来事で母が車で帰る途中、突然の激しい大雨が降り始め、傘を持たずに、杖一本で盲目の人が歩いているのを見かけて、見ず知らずの人に、方向が同じなので車を寄せて、「乗って下さい。送ります。」と声をかけたら、沢山ぬれているのに、笑顔で断られたそうです。母は家に着いて冷静に考えたら、盲目の方は杖での感触で道を覚えているのに、顔も見えない聞いた事もない声の知らない人の車に乗る訳は無いと、あの時母は、車の中に傘さえあればと、後悔したそうです。声のかけ方、言葉の選び方、その時、その場所、そして相手により、その態度違うのだから、どの様な言葉が良いか迷ったら、「何か私にも、出来る事はありますか？」と、どんな人にも声をかけられる目と耳と心を持ちたいです。パン屋さんでの体験と、雨の日の母の体験談で、今、色々な事が少しずつつながり出し意味がわかる様になってきました。勇気のいる事が、自然と出来る大人になっていきたいです。